

第3期第4回講座

311

次世代塾

伝える／備える

避難行動柔軟に判断

想定外への心構え再認識

東日本大震災の伝承と防災の担い手育成を目的に、河北新報社などが開く通年講座「311『伝える／備える』次世代塾」第3期の第4回講座「避難の明暗」が20日、仙台市宮城野区の東北福祉大仙台駅東口キャンパスであった。宮城県南三陸町戸倉小の元校長麻生川敦さん(62)と、南三陸町職員三浦勝美さん(57)の2人が講師を務め、津波の恐ろしさと避難行動の大切さを受講生を訴えた。

麻生川さんは震災発生後、児童全員を高台に避難させた。児童や教職員の命を預かる立場にあった校長として「防災マニュアルは必要だが、想定外に備える柔軟性も大切だ」と力説。町職員ら43人が犠牲になった防災対策庁舎で津波にのまれ、九死に一生を得た三浦さんは「津波が

見えてから避難を始めるのでは遅い。生きること、最優先してほしい」と訴えた。講話後、受講生ら約60人がグループに分かれて討論した際は「想定外の事態への心構えが欠かせない」などの意見が相次いだ。他にも「マニュアルを作ったと

しても安心は禁物」「集団心理にとられたいため、正しい防災知識を身に付けていく必要がある」との声も上がった。災害前から人と人、地域とのつながりを強めることの大切さを再認識したという発言も目立った。「誰かが『逃げよう』と声を出

せば助かった命かもしれないという三浦さんの話が印象に残った。声を出せたり、た指摘もあった。メモ 311『伝える／備える』次世代塾を運営する「311次世代塾推進協議会」の構成団体は次の通り。河北新報社、東北福祉大、仙台市、東北大、宮城教育大、東北学院大、東北工業大、宮城学院女子大、尚絅学院大、仙台白百合女子大、宮城大、学都仙台コンソーシアム、日本損害保険協会、みちのく創生支援機構。事務局は河北新報社防災・教育室。メール:jisedita@po.kahoku.co.jp



津波で大きな被害を受けた旧戸倉小＝2011年3月16日、南三陸町

○南三陸町戸倉小元校長

麻生川敦さん

証言 ・避難マニュアル整備に2年間議論重ねる  
・高台を選び難逃れたが避難後に犠牲者

訴え ・防災に正解なし。ベターの判断で行動を  
・被災者の心の傷に寄り添う支援必要

○南三陸町職員

三浦勝美さん

証言 ・防災対策庁舎から流されるも九死に一生  
・誰も逃げなかった。助かった命思い無念

訴え ・最悪を想定した判断大切。声を出そう  
・津波を見ない。素早い避難、備え不可欠

受講生の声

担当の東北福祉大インターン生は次の通り(敬称略)。3年内村大樹(ひろき)▷橋本瑚都(こと)



米ハーバード大3年  
デボン・ガンターさん(20)

学び深め伝えたい

同じ世代の人たちと震災 それを基に臨機応変の対応について意見交換をしたい ができるのと分かった「など」と思い、参加しました。自分では考えもしなかった角度から意見が出て勉強になりました。



つながりが大切

震災を機に防災教育に興味を持ちました。講話を聴き、地元をよく知る地域の人のつながりが大切だと感じました。(大崎市・宮城教育大1年・千葉七海さん・19歳)



当事者意識必要

津波の被災現場にいた当事者の話を聞き、被害の壮絶さ、避難の大切さを知りました。後世に伝えていくため経験と教訓を正しく認識するには、当事者意識を持つて震災を考える必要があると思います。(仙台市太白区・東北学院大3年・小島隆佑さん・21歳)

6月から約2カ月間、河北新報社でインターンシップ(就業体験)に取り組む米ハーバード大3年デボン・ガンターさん(20)が次世代塾第3、4回講座を受講した。ガンターさんに次世代塾の感想を聞いた。

被災体験のある受講生から直接、震災の話聞いたことも貴重な機会でした。消防士や看護師、教師ら、さまざまな立場で震災を経験した講師の話を通して、震災への理解を深めることもできました。学んだことを自国に帰ってしっかりと周りの人に伝えたい。